

自己同一性問題。この世の万物が原子によつて出来ていると考えられていたのは遙か昔のことで、数百年前の時点で既に原子よりずっと小さな素粒子という極小の粒を人類は発見していた。そして一般に詳細は伏せられているが神世紀中期には大赦によつて魂の实在が確認されている。

前提の開示はここまでとして問題は「氏紙楓と自称する義体たち」を氏紙楓と呼べるかどうかである。少し前までの義体のうち、少なくとも一体には氏紙楓のものとされる魂が観測されていたが、現在の義体たちにはそれが無い。

「沼男（スワンプマン）」という有名な思考実験がある。

概要を述べると『ある男が沼に落ちて死亡した瞬間同時に沼への落雷があり、落雷が沼を材料に人体を合成し、沼に落ちて死亡した男と寸分変わらぬ存在を生み出した。この複製体の呼称を「沼男」とし、この沼男は沼に沈んでいる男と、記憶も、思想も、人格も、細胞の劣化具合まで完全に同様だが果たしてこの沼男は男と呼べるだろうか?』というもので、あるものは『元となったものが異なるのだからよく似た別個体だ』と回答する

が、量子論の発展により『であるなら、男を素粒子のスープに溶かして再構築すれば元素も完全な同一だ。この沼男は男でないか?』と反論が行われる。

すると、あるものは『自己の連続性が絶たれた時点で男は死んでいる。故に別人格だ』と反論するのだが、直ぐにまた別のものが“五億年ボタン”を例示して追究を開始する。

問いが投げられては反論し、反論にまた反論を返す。

ずっと、その繰り返し。

哲学とは無限の問いであり、そこには無二の正しい答えなど存在しないのだ。

何かが在ったとしたらそれは精々、煮詰まった鍋の底に沈殿している塩辛い何かであり、結晶化した塩（えん）の如き存在で、世の世知辛さを表す元素的な何かである。

話を戻そう。逐一実験の説明を挟むのもテンポが悪いので省くが、五億年ボタンによ

る反論とはつまり『ボタンを押す前の数十年の人生より、異空間に囚われていた5億年の方が長く、囚われていた期間こそが人生の殆どだといえるが、異空間から帰還すると5億年の記憶が消失する。必然、5億年の歳月で成形された人格も失われる。意識は間違

いなく本人であろうが、この極大な記憶消滅は自己連続性の断絶と謂えるのではないか？記憶抹消を伴う異空間からの帰還は即ち死か？」ということ。

魂が発見された神世紀では多くのものが『魂が本人なら同一性は絶たれていない』と回答するだろうが、それは結局のところ『肉の身体の内、魂の身体がある』というだけであり、沼男の組成に魂が加わるだけで解答には成り得ない。そもそも自己とは何だろうか？ 沼男に一つ視点を追加してみよう。

Q. 沼に沈んでいる男の意識は、沼男に宿っているか？

答えはNOであり、不可知である。

“中国語の部屋”や“哲学的ゾンビ”で示されるように、他者の意識の内在を確認する方法はおよそ存在しない。

脳を連結し、肉体の壁が取り払われた意識と意識で接触することができたならば、もしかすると、クオリアくらいなら発見できる可能性はあるかも知れないが、意識は脳（もしくは魂）によって機能しているとすれば『肉体という境界は即ち自他の境界であり、それ

を失った意識同士は接触により融合融結するか、片方の意識が目覚めているうちは片方の意識が無い』ということが起こると推察される。実在した多重人格者や双頭の少女の事例を見ても、自らの肉体に宿る別人格の意識を直接発見するまでには至っていない。

他人格との交流には必ず日記や別の身体などの媒介を要した。そして主体の有無は分らないが、意に関わらず語り掛けてくるものとして幻聴の存在があり『幻聴は一つ以上の意識が部分的に溶けあった状態で聞こえるもの』と仮説を立てることができる。

また交通事故で意識不明となった後、運良く目覚めたはいいものの後遺症で幼児退行してしまつた青年の事例で、前触れなく唐突に、ある日を境に事故以前の知能に回復したというものがある。その青年の証言によると「事故にあつた記憶まではあるけど、自分が幼児退行していたという期間の記憶は無いし、意識も無かつた」という。

しかし『幼児退行してはいたが、自発的に食事を摂っていたし家族との会話も行われていた』と記録にはある。

真実、証言通り退行していた期間“彼”の意識が眠り続けていたとして、であれば“退行期間中に動いていた彼”は一体何者だろうか？

私たちのこの意識は本当に私たちのものか？

思考しているこの私は、本当に一人の私なのだろうか？

統合失調症や脳疾患者を引き合いに出すまでもなく、人は身体の具合によって容易く人間性から思考が塗り替えられてしまう。『これは私の自由意思だ』と思い込まされているだけではないか？

もしかすると支配率や領域が異なることで意思的な振る舞いに現れず、認知不能だけで、誰の中にも無意識という名の無数の別人格たちがひしめいているのかもしれない——と、私は偶に思うのである。

*

僅かに月明かりの灯る夜に、試験室で機械の静かな起動音がする。

(よし、動いた。やってみるものだな)

人影が少しふらつきながら灯りを探して歩き出す。

これは氏紙楓が2度目の黄泉下りを行う、少し前の出来事。

深夜だというのに、設備の熱暴走抑止のための油分を帯びた黴臭い冷房の効いた、二酸化炭素濃度の高い我が職場の小窓から明かりが差している。

近付いて覗き込むと、また私達の上司が非効率を分かっているながら徹夜で何やら作業をしているようだ。

『前みたいな炎上案件はごめんだぞ』という厭わしさに半歩下がりたい衝動を抑えながら『ここで働き続ける以上、撤退は許されないのだ』と、ここ数年で骨身に沁みて理解した諦観を用いて、薄暗い廊下と向こうを隔てる無機質な扉をくぐり、ワーカホリックな上司の背中に声を掛けます。

「お疲れ様です、主任。まだ帰ってなかったんですか」

「ああ：おつかれ。資料室ひっくり返したらこれを見付けて、今取り掛かっている課題が一気に拓けるアイデアが降りて眠気が吹っ飛んで居ても立ってもいられないんですよ」

ああだめだ。気持ちだけ走り出して言葉を置き去りにしている。

主任がこういときは大抵だめだ。

技術部全体を巻き込む、どうあっても逃げられないやつだ。

主任に神世紀初頭のことを記された資料を手渡され、指示されながら説明を受ける。

「……これは昔、鎗矢の訓練用に開発された精霊で、予めプログラムされた動作を繰り返す単純なもので、逸話を再現する力も無いし、今の勇者システムで運用されている精霊とは全く別物ではあるんだけど、その分素体としての自由度が高い。

義体から取った累積データを整理して組み込めば、人のような自立人形も不可能ではなくなると思うんだ。実用するにはどうしてもサンプルが足りないから公費使って身障者の補助具として無償で貸し出す福祉制度に組み込んでもらう様に上に掛け合うための資料とデータと論文を最速で出すために実験の日取りと事務整理をガリガリ片付けてるところで斎藤さんも手伝ってくれるよね？」 「嫌です」 そう、じゃあこれとこれとこれと——」

もうやだこの組織、公務扱いで残業代出ないのに仕事量おかしもん。

いや、残業代出たとしても仕事量おかしが…

『年端もいかない勇者様達が命を張って下さっているのだからこれくらいは』って言い分は分かるけど……分かるけどっ！ だからって個人の処理能力が使命感でパワーアップしたりはしないわけですよ。

主任みたいなハイスペック超人たちを基準にしないでください、マジで……

機密の深いところに触れる役職柄、転職も許されていないし、どうしてこんな所に来てしまったんだろう……入赦できたときは嬉しかったのになあ……実家に帰りたい……

「聞いている？」

「あっはい」

……主任を止められるとしたら、まだプロジェクトが発足してない今しかない。

止められなくても、せめてデスマ回避もしくは楽なポジションを確保したい……サイバ
ー課の3月の悪魔対策に巻き込まれたときはもうほんと酷かった……

奇声が飛び交い、無造作に床に転がる動かない同僚たちの姿……なんてのは序の口で、
不眠不休のせいで幻覚が見え始めるし、訳もなく突然涙が流れ出すし、死の三月と書いて
Death March な恐怖のパレードだっただよ……（行進と三月の綴りはMarchと共通。）

「……でも主任、そんな昔のシステム再構築できるんですか？」

そうだ。いくら主任が興味を持って、もう二百何十年って昔のシステム。

既にロステク化していても可笑しくないし、たとえ出来たとしても現行の勇者システム
との互換性は失っているだろう。だからこの話は終わりにしましょう、そうしましょう。

「覚えてませんか？ まあ、もう3年も前ですからね。ほら、晴信さんから持ち込みであつたじゃないですか。赤嶺家遺構からのサルベージの話」

三年前…… 三年前……？

神樹様の異界に召喚されてるか、されていないかの時期………あ。

「あー……… たしかその時期は、回収した勇者システムの方に駆り出されていたのでノータッチですね、私。まあでも、既に在るなら私が手伝うことってありませんよね？」

「安心して下さい。今回は斎藤さんに最前線の仕事を廻しますから」
そんな心配はしていない……

「とりあえず、行政、サイバー課、福祉課との連携は不可欠なので、この起案書持って説明してきてください。私はもう少し詰めます」

「は？ そんなの赦内メールでいいじゃないですか」

「まあ、電話とメールの組み合わせでも良いんですが、交渉に来たと多数に視認され既成事実化して、相手の居留守を無効にするための念押しに」

大赦に限ってそれは必要無いでしょう……

勇者様達関連ならまだモチベーションも上がるけど……面倒だなあ。

部屋を出て直ぐに対面する積まれたまま放置された段ボールたちは、何度も使い回されており、角は丸く潰れ、全体的に柔らかく萎れていて、上面には誰かが台代わりにカッターナイフを滑らせた痕跡が残る。

紙の段ボールは何も無くとも湿気を吸って弱っていくので、新鮮な段ボールを出荷するための工場が必ず全国一地域に一つは設置されており、流通インフラを支えていたりするのだが、さて、このくたびれた段ボール氏が役目を終えるには、あと如何ほどかかるのか

「よく考えたら、他人に説明できるほど内容知らないですけど……」

上司の命令に逆らえず、この時間でも誰かしら居るであろうと目星をつけたサイバー課を指して、続く廊下を渋々歩いていると右手側の部屋から物音が聞こえてくる。

「なんだ……？ 試験室……？」

部屋は照明を落しており、扉の小窓から中を伺い知ることはできない。

息を殺して聞き耳を立てると、確かに人の気配がある。

（まあ、どっちにしる曇りガラスだし確認するには入るしかないけど、明かりも点けずに何してるのか？）

大赦のセキュリティを突破して空き巣に入るような大胆不敵な王泥棒なんているわけがないので、無警戒に侵入。

「大丈夫ですかー？ 懐中電灯はたしか消火器のとな……らやあっ?!」

鉄パイプか何か円筒状のものを踏み付けてしまい盛大に転ぶ斎藤の目前に、爪が黒く塗られ月光を纏った手が差し伸べられる。

「……ッ痛い」

「大丈夫ですか？」

「ありがとうございます………なんで居るんですか？」

一つ目の漆黒の仮面を着け、全身に高濃度の漂白剤をぶちまけられたかのように白く輝く小鬼が斎藤を見下ろしていた。

「昨日の話の続きと言いますか、伝え忘れていたことを思い出したので」

「何もこんな時間にいらっしやらずとも……（どうか何処から侵入したか？）」

理由はともかくと、斎藤が照明のスイッチをONにすると問題無く明かりは点いた。

「いえ、これは遠隔なので、いらっしやってはいいですよ」

なるほど。どうしてメールを使わないのかは置いて、ここに居る理屈は分かりまし

た。

「主任ならまだ作業していますよ。」

あなたが持ち込んだ案件のおかげで私も残業中で……何探してるんですか？」

「紙とペン」

「メールじゃダメなんですか……それ？」

「まあ試してみたら来れたってのもありますけど、これなら神奈さんに知られずに動けるので」

神奈というのは、この彼、だか彼女、だか分からない鬼娘が自称している別人格のことだ。

勇者様たちと神官の何人かはこの自称高嶋友奈の存在を信じているらしいが……

「ではこのメモを主任さんに渡し……いやこれは自分で渡さないと意味がないか」

楓がメモを畳んで袖に仕舞う。

「結局何の用で……」

「大した話ではありません。ただ」に組み込むパーソナルデータの補足と、私として振る舞う自律義体・ Σ ・精霊はすべて私として扱うことの同意とか誓約的な話です」

「はあ……何の意味があるのか分かりませんが……」

「念のための保険ですよ」

そして現在に至る。

「私——と言ってもまあ、氏紙楓の振る舞いを再現しているだけだから、君たちにとってもそうとは限らないけれど」

先ほどまで狼藉者たちを追い回していた冷酷な笑顔は大きな一つ目の仮面で覆い隠されてしまい、今はどんな表情をしているのか読み取ることができない。

「……大赦は彼のデータを使って、こんな悍ましいモノを作っていたのね……」

「言っておくけれど、これは飽くまで『私の指示でそうさせたこと』だから、大赦に怒りを向けることではないよ」

「その大赦の傀儡が吐いた言葉を私が信じると思うの？ 馬鹿にしてる……」

「まさか。一応、言うだけ言っておいただけよ」

至って穏やかに。事も無げに鬼は語る。

「だけどね。 また心配させても悪いから、誰よりも最初に知っておいてほしくてね。私のところへは郡さんだけ呼んでもらったのよ」

俯いて震える千景の肩には、怒りと悲しみが混ざった激しい空しさが渦巻く。

「どういうつもりよ…… 何のつもりなのよ……!」

これじゃあ……もう……あなたが帰って来ても、私たちには判らないじゃない……!」

千景がふり絞るように言葉を吐き出しても、心の無い機械には届かない。

「うーん……? こんな感激家だったかな?

まあ、前も言っただろう? 他人に意識が宿っているかなど初めから知り様のないことなのだから、私が私として振る舞い、私であると自認する限り私は私なのだ。……細かくは定義の話になるけど」

楓の記憶データには、寝る間も惜しんで楓を助けようと情報収集に奔走していた勇者たちの姿は無いため、たった今、千景たちの努力が永久に実を結ばなくなったと気付くことはできない。

覚られないように目元を拭い、向き合う。

「…いいわ。確かに彼は、そういう人だったわね。　良く出来たオモチャだわ！」

「まあ…その…ごめんね。」

私は、あの日黄泉に下りる直前までの私だから、向こうで何が起こったのかは知らないし、あっちの私が戻って来れるのかも私には分からない」

向き合いはしたが、千景は目の前のそれを楓だと認めることはできなかった。

本人と寸分変わらぬ振る舞いをする鬼を、目が、耳が、記憶が、楓だと認識してしまっている自分の不甲斐なさを認めたくなかったのだ。

心まで彼だと認めてしまったら本当に失ってしまいそうで。恐ろしくて。容認できなかつた。

(…この鬼に彼の居場所をそっくり明け渡してしまったあと、彼を自分に置き換えてみたとき……きつと私は正気でいられない……)

私でないものが私の振りをして、何食わぬ顔で高嶋さんたちに受け入れられて、幸せそうに笑っているところなんて考えたくない…　許せないのに私からは一切手出しができずに、高嶋さんが私の偽物に笑顔を向けて、話しかけて、手を繋いで高嶋さん！高嶋さんと!!　嫌！　高嶋さんに近寄らないで！

私は、ここに存在している私だけが郡千景なのよ！ 私の代替品なんて、模造品なんて冗談じゃない！ そんなの絶対に許さない！ 耐えられない…っ!!)

自分の人生は自分だけのもの。

何者にも奪わせて良いはずがないと考えたところで思い至る。

氏紙楓は未来からやって来て、既に過去の自分の人生を奪ってしまっているのだと。

たとえここが神樹の中で現実ではないとしても、不可抗力だとしても、その事実は変わらない。

まして、彼の分身たちが記憶を持ち帰る方法を見付けてしまったら？

彼が黄泉から帰還できていない状態で中立神を退けてしまったらどうなる？

現実の彼の元に届けられる記憶が義体のものだったとしたら…？

それは最早死ですらない。彼という存在の、人格の消滅を意味する…

私たちが彼にこの状況を強いたというの…？

どうして…

……いいえ、まだ彼の狂言という可能性も……でももし彼の言葉を信じず彼として接し続けて、後で事実だったと分かってしまったら……？　きっとそのときには偽物に対しても愛着を持ってしまっているでしょうね……

たとえ真実が如何であつたとしても、一人の人間として愛着を持ってしまっている相手を偽物と断じることなんて、きつとできない。仮にできたとしても、2度も3度も彼を殺すような真似はしたくない……

「無理に私を氏紙楓だと思わなくて良い。基本的に私から君たちに接触することはしないし、現場で遭遇しても単なる義体として振る舞う。

ただ今は数を揃えることが必要な局面だから、今回の件が片付くまでの間だけ、少し目を瞑っていてほしい。あとこの件、加賀城たちには「言わないわよ……」言えるわけないでしょ、こんなこと……仕事に戻りましょう……」

「……迷惑を掛けます」

郡千景は十字架と傷を背負った。

たとえ楓自身がどう感じ、どういう思想の下に行動していたとしても、誰かを犠牲にして得た人生は誰かの犠牲にされ得る人生だ。そうでなければならぬ。

(けれど、全員がそれを背負う必要は無いはず。

誰かが背負わなければならない業だというなら、私が墓場まで持っていく…

皮肉ね…あなたの個人主義を問い詰めた私が、同じ道を進もうとしているのだから……
それでも、せめて幸せを願ってくれた彼の想いだけは遂げさせてあげなければ……)

木々の合間を駆け抜け、レジスタンスを制圧してゆく。

いくら一般人が束となっても神の力を振るう勇者たちに敵う道理は無く、物の数に入らない。薄鬼部隊の大量投入で人手も十分となり、山中のレジスタンスの全面制圧は時間の問題だろう。

しかしそれは、天の神に対峙する勇者たちとも置き換えることが可能であり、埒外の力の前に人間は無力だという証明であり、人類の可能性の程度のほどを神々へ示していることに勇者たちは気付かない。

勇者たちが人々へ力を振るうほど、結果的に人類の矮小さがつまびらかとなる。

中立神の講じた「人類への試練」に対する回答の主体者は勇者ではなく、勇者たちは舞台装置の一つでしかなかった。

十八人目のレジスタンスを無力化したところで、見張りに置いて行く義体が足りなくなり、一時休憩を入れる。レジスタンスたちは概ね五人一組で動いているようだ。

ふもとの町から吹き上げる風で常緑樹たちがザアツと木の葉を鳴らし、義体の一体が千景の視線を捉えて、いま思い出したかのように呟く。

「しかしまあ、郡さんがダメとなると皆ダメだろうなあ。残念だ」

「（…本当に生きているみたいに振る舞うのね……）私はあなた達のこと彼だとは認めないけれど」

「あーいいから私に対してそういうの。面倒臭い。」

感情どころか意識さえ持たない私たちに対して葛藤してもするだけ無駄よ
負い目から暫し千景は沈黙する。

「私にそれを確かめる術は無いし…理屈ではないのよ……こういうことは」

「耐久試験で蹴り倒される犬ロボット動画で紛糾する人類、ホンマめんどくさいわ」

「うっ… 確かに同じことかも知れないけど…」

「何？何なの？私のこと好きなの？ラヴなの？」

「そんなわけないでしょ、自惚れないで頂戴」

「即答するじゃん？」

「むしろ、あなたの方こそわたs…じゃなかった何でもない聞かなかったことにして！」

口速に返答拒否する千景。

「ならエエやんか。気にするほどのことちゃうで？」

「それは…だけど」

しかし割り切れない千景。

「まあ、どうでもいいけど、自分にとって何が大事なのか見失うでないよ」

「……あなた本当に意識も感情も無いの？」

「無いよ。いわば全自動遺言代行機みたいなもの。 ヒトが『』に恋することはあっても逆

は無く、『』がヒトに恋焦がれている様に振る舞うことはできても恋することは無い。出力

される結果が似ていても決断プロセスが異なるから。

ヒトに置き換えると『脳を持たず、外部刺激に対し脊髄反射的に建前のみを返すゾンビ』って具合だね。そんな感じで、そういうモノ」

『死体に死んだ気分を訪ねるだけ無駄だよ』と、純白の沼男は自らをそう諭える。

「そう……」

そういえば、彼らの中には居なかったようだけど、神奈さんは今どうしているのかしら……？……このことを知らないはずはないけれど、知っていたら止めていたはずだとも思う……

「あの……ええと、あなた達のことは何と呼べばいいかしら……？ 申し訳ないのだけど彼の名前で呼ぶのは……」

「ああ。どちらにせよ中身を隠して動くための仮名が必要だから、気にしなくていいよ」

「さっき増援の連絡をしていたとき『薄鬼』と呼んでいたけど、あなた達のことの良いのよね……？ 何か由来があるのかしら？」

「そうよ。由来ってほどではないけれど、何カ月だか前から『鬼ヶ白の鬼娘』って都市伝説が生まれていたから、鬼ヶ白の白を義体の色にかけて薄鬼。まあ小鬼でも鬼子ちゃんでも好きにお呼びよ」

小鬼は手持無沙汰で暇なのだろうか。傍に生えていた細い木にぶら下がる様に脱力し、木を軸にフランフランと身体を揺らしながら、自らが元となった都市伝説の話をする。

「もう少し固有名詞的な名前のほうが呼び易いのだけど…せめて鬼灯（ホオズキ）とか…
…というかそれ大丈夫なの？」

「問題無い。というか仕方がないさ。攻め込まれた大赦に選択肢は無かったもの」

「そうではなくて『噂の姿に噂由来の名前なんて付けて大丈夫なのか？』という意味よ。

レジスタンスが解放されたあと絶対ロクでもないことになるわよ？」

そして早々に都市伝説の域を越えて陰謀論者のオモチャとなり、あることないことゴシツブ記事が書かれる未来がはつきり見える。

ただでさえ大赦の信用が崩れているときに、彼らの言葉に説得力を与えたりしたら……

「ハア……気が重い……」

「ハハハ。まあ、成るようになるさ」

それは成るようにはかならないというだけでしょ…まったく他人事ね……

今夜はいつも以上に満月が眩しい。

そう感じるのはただ単に暗い森の中に居るためか、はたまた氏紙楓の救出という重責を一つ失ってしまったためだろうか。 暗闇にクッキリ浮かび上がる小人が、ピヨン。ピヨン。と飛び跳ねながら近付いてくるのをボンヤリと眺めながら考える。

「……増援が到着したようね。 とにかく。 大赦だけで済めばまだいいけれど、乃木さんがとっくの昔に限界だから、これ以上のストレスはできるだけ掛けないであげて……」

「善処する」

「……ところで、増援はあなた達だけなのかしら？」

数十体増員のオーダーだったが、到着した薄鬼はわずか3体。 千景と共に待機していた2体を合わせても5体であり、搬送一回分の人員にしかならなかった。

「実は連絡のあと直ぐに潮目が変わってしまったね。」

『ここには回収要員だけで十分』という判断になったんですよ」

「何かあったのね。 状況は？」

「どの私だったかは忘れてしまいましたけど、私達の誰かがレジスタンスをわざと逃がすようなことをやっていたらしく。 『襲い掛かつては一人を取り逃がし』を繰り返し、私

達に対する恐れと情報が向こうで共有されたことで、レジスタンスは粗方『今のまま突撃

しても無理だ』と判断して下山したようです」

「現在のリスクは巫女のレポートのみということ、『二陣が来るまで露払い薄鬼部隊だけで十分だから、勇者は本陣を固めよ』とのこと」

薄鬼の報告を一通り聞いてスマホを確認すると、犬吠埼風から勇者部員への〇〇一斉送信メールが入っている。

(いつの間にかサイレントに切り替わっていたのね。気が付かなかったわ)

前半の内容は薄鬼の報告と大きな差は無かったが、それとは別に勇者たちの判断で、大赦本庁を守るもの。眠らせた巫女たちを安置している対策拠点を守るもの。市街に出て暴動を止めに行くもの。三組に分かれて事態の收拾に当たる作戦が書き加えられていた。

文末には炎上する街の写真が添えられている。

「ああ、やっぱり街の状況は知れ渡ってるか。大赦には、秋原さんと赤嶺と、結城さんと東郷さんを除く元祖勇者部が集まっているよ」

「あなた達の話にこの情報は無かったわ。どういう…いえ、問い質す時間が惜しい」

口では『あれは彼ではない』と言いながら、薄鬼との遣り取りで少しずつ信用し始めていた己の未熟さを恥、千景は答えを待たずに飛び立つ。

(急がなければ！ 感傷に浸っている場合じゃない……！)

高速で景色が流れていく。

悩みや不安というものは初めから存在しているものではなく、それを自らが想像し創造し認知したその瞬間にのみ存在している。ならば想像する余暇を捨ててしまえば悩むことは無い。

“決意する”とは、意を決するということ。

意を決するとは、指針を定めて無限の選択肢の殆どを切り捨てること。

たとえ切り捨てた選択肢に正解があり、選び取った選択肢が誤りであったとしても結果を受け止める覚悟を持つということであり、覚悟とは、自らに対して自らの選択の責任を負うことである。

(乃木さん達は人命救助に向かったはず！)

郡千景は、この暴動が敵の陽動であることに気付いている。

恐らく戦力の分散によって窮地に追い込まれることになるのだろう。

しかしそれでも人々の救助へ向かう。

仲間を信じてリスクを手に取り、仲間の元へ駆けつける。

今や、千景の中にあるのは『成すべきことを成す』というただそれだけであり、己の中の亡霊と決別した彼女の行動に迷いは無い。

「(居た!) 伊予島さん! 状況は!？」

「千景さん!」

空へ赤く伸びる煙を見下ろすビルの屋上に、勇者たちの援護を行っていた杏を発見した。杏の元に降り立つとそこは轟々と耳を打つ風の音がうるさく、風を正面から受ける角度に立つと腫が急速に乾き、煙と共に巻き上げられた極小の粒子が目をチリリと擦る。

「現在、各地域の体育館等に町の人たちを避難させているところです!

誘導はお巡りさんや地域の方たちが行っていて、収容場所はタマっち先輩と芽吹さん達が護っています! 一人で弾幕を張れる私と、機動力のある若葉さんと友奈さんは避難中の人たちの警護です!」 「銃を使える楠さん達を守備に充てているのね! 私も二人に合流するわ!」 「よろしくお願います!」

一瞬朱く煌めいた飛行物体に向かって飛翔する。

(それにしても、一体なにが起こればこんな状態に成るのかしら…)

無差別に町の至る所から火炎が噴出していて、道路は落盤で穴だらけ。加えて河の水が

逆流して橋が割れているなんて無茶苦茶だわ。)

千景の疑問は当然で、視界に映る景色は一介のテロリストに引き起こせる事象から遙かに逸脱しており、それは巨大地震にでも遭ったのではないかという様な有様で、まさに神命で下される大災害そのものだった。

テロリスト相手とはいえ、何故勇者たちが人に武器を向け続けているのかといえば、これが敵の攻撃であり、敵は一般人を巻き込むことを良しとしたということであり、ならば、いづどこから不可視の結界からバーテックスが急襲を仕掛けてくるか知れないということに他ならず、そして敵がどういう手段でこの状況を作り上げているのか不明だからだ。

バーテックスを用いずとも、月の巫女がたった一人、人ごみの真ん中で刃物を振り回すだけで大混乱となる。例えばカガミブネで移動しながらであれば、十人そこそこの死傷者では済まない。謂わば操られた巫女たち全員が超能力を持った切り裂きジャックであり、武力行使を躊躇うわけにはいかないのだ。

以前行われた氏紙楓の狂言による影響もあるのだろうが、それほどまでに勇者たちは追い詰められていた。

「(本当は襲撃に備えて温存したいところだけど……) 往くわよ!七人御先ッ!」

群体の精霊を身に降ろし、視界が拡大する。

七身一体の精霊(七人御先)の能力は分身と人数の維持だが、その真価は単純な死に難さに非ず、七身一体とは即ち一つの意識で七人分の脳と感覚器を獲得するということであり、空間把握能力の超越を齎している。

例えば、人間の目は顔の正面に2つあることで奥行きを認識し、世界を三次元的に捉えることを可能にしており、鯨類やコウモリ等のエコロケーションによるマッピングも同様、受容体の大きさや数によって精度が左右し、機械で言えばGPS等の測位システムは複数の送受信機同士の位置関係からポイントを計測する。それらと理屈を同じくし、勇者の身体という高機能送受信機7体を意識というネットワークで連結した結果、人類には在り得ない認知。自らを見下ろす俯瞰者視点の獲得に至った。

更に、分身一体一体の身体能力は他の勇者たちと差異はないが、七体を操るための機能は相互に連結し一個の意識として統合されている。つまり現在の千景は、7つの脳を並列化した計算能力と洞察を持ち、あくまでヒトの延長線上にあった本来の勇者の身体強化とは別次元の情報処理能力が備わっていることになる。

今回の人間に対する切り札の発動を起源に、僅かな機微から人々の行動とこれから起る出来事を考察・予測し続け、これまでバーテックスとの戦闘では発揮されることがなかった〈疑似未来予知〉の能力が開花する。

「千景か……」「乃木さん、高嶋さんは？」

若葉が千景の元に降りる。

「友奈は避難所の向こう側にいる。ここは気にせず向かってくれ」

「ええ。言われるまでもなく、そのつもりよ。ただ……」

千景は高嶋の配置を確認し、一体を若葉の元に残して三方へ散開する。

「私は、今のあなたを独りにしておけるほど不用心でもないわ」

「……………すまない」

「謝らなくていいわよ……ほら顔を上げて。」

園子さん達ではないけど思い付いたことがあるの。聞いてくれる……？」

「私は構わないが、いいの……？　そういうことは杏の方が……」

「……あなたの心の支柱だった上里さんが居なくなっただことで、自信が揺らいで折れかけていることは分かっている。それでもあなたは私達のリーダーで……そんなあなたでも私が何

年も拘って憧れ続けた乃木若葉なのよ」

上里ひなた失踪後の若葉は日常的に不眠を患い、横になっても数分意識が落ちては、魘される（うなされる）自身の声で目が覚めるといふのを繰り返していた。慢性的な睡眠不足から疲労は蓄積し、集中力も判断力もおぼろと成り果て、鍛錬でスイッチを入れようとしても自分がイメージした通りに身体が動かない。

何もかもが空回りし、上手くいかない。

出来ていたはずのことが何もできない。

苦し紛れに瞑想で心身を整えようとしても気掛かりで集中できず、黙っていると悪いことばかり想像してしまふ。喪失の不安が祓えない。

苛立ちは募り、解消されないストレスに消耗し、不甲斐ない自分自身の情けなさに絶望し悪循環の深みに転げ落ちて行く。

『自分はこんなにも何も出来ないやつだったのか』と張り裂けそうになる。

乃木若葉は類稀な身体能力・学習能力に、裕福な家庭と素晴らしい親友を持つという非

常に恵まれた環境の中で育ち、出来得ることは全て行うことができていた。その圧倒的な自己コントロール感から後悔する機会は殆どなく、小さな不安も上里ひなたの異常な献身によって尽くが取り除かれており、乃木若葉は生まれて初めて自己の統制を失った。今の若葉は使命感のみで何とか動いている状態である。

「上里さんがあなたを輝かせていた。それは確かよ。」

でも。だからといってあなたの資質が失われたわけではないわ…今は疲れて混乱しているだけのよ…」

「だが、ひなたから離れた今の私こそが本当なんじゃないか？

ひなた在りきだったこれまでの私は、自立した個人とは言えないんじゃないか…？」

「別に良いんじゃない？ それでも」

「良いわけがあるか！ ひなたが危険に晒されているのに、そのせいで私はひなたを助けられないんだぞ…!! こんなことで良いわけがないだろ！」

動悸がして若葉は錯乱し、警護任務中であることを忘れてしまう。

この最中もずっと『きつと自分が間違っているんだ』と思いながら感情を吐き出し続けている。

——自己矛盾に満ちた見る影も無い私を遠巻きに見つめる自分が居て、その自分が私に憐憫を向けている。『哀れだ』と『惨めだ』と。 あんな視線を仲間たちから向けられるのは耐えられない。

だから逆効果だと分かっているながら勝手に口がこじ開けられて、相手に感情を叩きつけてしまう。そしてそんな自分にも絶望する。

「負い切れない分は私に任せなさい…」

また刺さった。

「これは貸しよ」

耐えられない。

「落ち着いて聞きなさい、乃木さん」

いやだ。やめてくれ。

「ああ…もう…：…：… しょうがないわね…」

瞬く間に視界が閉ざされる。

痛みは無く、瞼も開く。視力を失ったわけでもない。

(…?) 温かい…?)

若葉は千景に抱き締められていた。

ただ頭を優しく撫でられるだけで、若葉の胸に蓄積していた苦々しいものたちが熱と共に目から溢れ出る。

「なに…を！ちかげ！」

頭を撫でていた手が背中へ降りてトン…トン…と静かなリズムを刻む毎に、乱れていた呼吸も心音も安定していく。自分はここまで単純な人間なのか。

…：慰めてくれる相手なら誰でも良かったのか私は… 本当に、私は、どうしようもないな…

「乃木さん、聞いて…」

自立していて精神が安定した人間というのは、誰にも依存しない人のことではないの。いつの間にか大天狗も勇者システムも解除されている。

こんなときに何をやっているんだ私は…

「乃木さん！」

千景の声に意識が引き戻される。

「乃木さん。つまり目的は精神の安定であって、依存はその手段の一つでしかないのだから、目的の結果さえ出せれば誰かに依存する心があっても良いのよ」

「しかし、それでは…」

「ええ。勿論一人に依存すれば、その一人がアキレス腱になってしまうわ。だから複数人に少しづつ持ってもらえばいい……もつと私たちを信じて。頼って、乃木さん」

この世界に来てからのことを思い起こす。

…私は…仲間たちのことをきちんと言頼できていなかったのか…？

そんなことにすら今の今まで気が付いていなかったのか…？

…ダメなりリーダーだな…私は。

「すまない……いや…ありがとう千景… すこし…落ち着いた…」

「…別に、乃木さんだって同じ立場になれば同じことを言っていたでしょうし、ただそれに私は高嶋さんの優しさを添えただけよ」

「そう…だな。そうかもしれん…」

二人はなんとなく感じていただけだったが、実際に若葉は以前、楓に対して同様の台詞を口に出している。『自分たち仲間にもつと頼ってほしい』と。そういった言葉を。

その結果、結果的に、他人に掛けた自らの言葉が巡り巡って若葉自身を助けた。

昼食後のまどろみに似た安穩への誘惑に抗い、千景の抱擁から解放される。

「……さて千景。今の私の判断力は当てにならない。任せていいか？」

「主語が無いと分からないわ」

「ああ…そうだな。暫くで良い。千景に西暦組のリーダーを任せたい」

「……任されたわ。まあ、尤も、必ずしもあなたに返却できるとは限らないけれど」

「ふっ、それも良いかもしれないな」

「…冗談よ」

「…約束だ。今度こそ私は……いや、

私は私を想ってくれる友のために、必ずリーダーの座に返り咲いてみせる…」

その瞳は未だ夜陰への不安に震える幼子のように頼りなく、しかし千景を見つめる視線

にもう迷いは見られない。

友に支えられ、手を引かれ、突き立てた誓いが杖となって若葉は立ち直る。

「本当にバカ真面目とか何というか……もう少し自分を労わりなさい。

でも…そうね。あなたが休んでいる間くらいは何とかしてあげるわよ。」

(あまり自信はないけど)

平静を取り戻した若葉は再び勇者に変身し、強化された視力が見えなくなっていた街の様子を捉える。

「見えないのは生身だからだと思っていたが…これは…」

「火事の明かりで停電が誤魔化されているのよ。意図的に」

「分らないな…一体何のために…」

千景が観測した限り停電規模は全域に渡っており、路面は全面くるぶし辺りまで均一に水没している。水深が勾配を無視して維持されていることもそうだが、さらに不可解なことに、強い光だけが表層で反射されていて、水面下は画像編集ソフトで雑に塗り潰したような黒一色をしている。

「恐らく筋書きはこうよ。」

第一段階。レジスタンスを扇動して大赦を襲撃。

第二段階。月の巫女たちが街に火を放ち、月の引力で引っ張り上げて足元に張った海から注意を逸らし、同時に火事の炎で停電の事実の隠匿。

第三段階。月齢に従えば、自然には有り得ないタイミングでの月食と共にパーテックス

を展開させ、西暦時代の焼き直しでもするように人類を恐怖と混乱の渦へ落とし入れる。

第四段階。『大赦に陳情に向かったら天変地異が起きてバケモノが降ってきた』だとか適当な理屈をでっちあげて避難所で吹聴し、月食の終わりと共に上里さん達が現れて場を収める。

結果。濡れ衣と全責任を負わされた大赦は失脚。 そんなところじゃないかしら」

火事の炎が海面から這い上る夜霧で静かに勢いを失ってゆく…

「民間人への攻撃…」

「いいえ、乃木さん。恐らく上里さんは無血での乗っ取りを画策しているわ」

「確信があるのか？」

「完全に向こうに場を支配されているのに、未だ物損と怪我人しか出ていないのよ」

こちらの手牌だけでこの現状を維持することは不可能。

『ということは逆説的に彼女たちに傷害の意思は無いのだ』と…なるほど。

「そして、そこから導き出される解は…：…始まったようね」

空から。海から。 地平の虚空から。

滴るような

湿った音が聞こえ

篝火はほつぽつと残るのみとなり、空には食べかけの月がニンマリと微笑んでいた。